

通假字を見るための上古音概説

村 上 幸 造

キーワード…上古音 金文 簡牘 通假 再構音 擬音

はじめに

金文や簡牘など出土資料を讀もうとすると、見慣れない字形の形聲字や、假借字が多くみられる。これらの同音あるいは音が近い代替字を「通假字」と呼ぶ。通假という語に明確な定義はないようであるが、同義で使われた代替字としておく。またいわゆる假借と通假の違いは、本字の有無であると言いが、何をもち「本字」とするのか明確ではない。

これら通假字を解釋するためには上古音の知識が不可欠である。通假は多くの同音字が使われるとは限らないのであり、後世から見ての近似音も多い。では音が近いとはどの範囲までがそう言えるのであるのか。

本稿は上古音の概略と通假の實例を簡単に紹介する。なお上古音とは『詩經』『楚辭』などの押韻例と諧聲系列を基にして復元された音系を指し、先秦音系ともいう。廣くは、漢代までを含めていう。また中古音とは『切韻』（隋仁壽元年（六〇一年）の序）に反映されてい

る音系である。上古音と中古音は切り離された音系ではない。中古音の復元から、上古音へと研究が進んできた。とうぜん中古音についてもある程度を知っておかねばならない。なお諧聲とは、いわゆる形聲字など聲符を同じくする關係の字をいう。それぞれの形聲字がいつ作られたのかも問題となる。

なお用語に關しても注意が要る。傳統的な音韻學の用語に現代の音聲學の用語が混在し、しかもその用語の翻訳が日中で異なる。

上古音研究史

中國語音韻學の各書に詳しく説明されているが、いま簡単に紹介する。

中國の學者たちは、『詩經』の押韻が「今」と異なることに気づいており、それを「古音」と呼んでいた。そして押韻や諧聲字により分析を進め、『廣韻』（『切韻』の増補改訂版、一〇二一年）等にならい、代表字や數字を當て「部」と名づけた。しかし實際にはどのような音なのか、他の音とどう異なるのがよく分からなかった。

そこにスウェーデンのカールグレン（高本漢）がヨーロッパ言語學

に倣い、音價推定（擬音）という方法で、まず Ancient Chinese（中古音）と名づけた『廣韻』に據る音を、復元・再構（reconstruction）（構擬）してみせた⁽³⁾。Archaic Chinese（上古音）を含めたその後の研究をまとめたものが⑩高本漢『中國聲韻學大綱』（後述の「主な工具書」を参照。以下同じ）であり、その古漢語字典が④GSR『漢文典』である。以來古音研究は、音價推定（擬音）を行いながら、カールグレン説の修正として展開する。

なお現在、中古音と上古音の英文表記は、語彙・語法などを含めて一般にそれぞれ Middle Chinese および Old Chinese と稱されている。それぞれ MC と OC に略す。

漢字音の構造

まず漢字音について、一字が一音節とされている。中國語の音節つまり漢字音は、聲母と韻母とに分かれ、さらにそこに聲調がかぶさるが、聲調を韻母に含めていうことが多い。韻母をさらに細分して、介音・主母音・韻尾とに分ける。つまり、

音節 Syllable = 聲母 Initial + 韻母 Final（+ 聲調 Tone）
韻母 = 韻頭（介音）Medial + 韻腹（主母音）Nucleus + 韻尾（尾音）Coda

韻（ゝ部）Rhyme = 核音 Nucleus + 尾音 Coda

詩の押韻において、介音の差異は無視される。つまり上古音の韻部は、介音の異なる字を含む。そのため、介音はむしろ聲母に含めて考える方が都合がよい。上古音から中古音への聲母・韻母の變化は、主

に介音の働きによる。従って⑧B-SOC（五三頁）は音節を、

Syllable = Onset + Rhyme
Onset = Initial + Medial
Rhyme = Nucleus + Coda（+ Postcoda）

と分ける。さらに Initial の前に「前聲母」Preinitial あるいは接頭辭 Prefix を置く。いま「前綴」と総稱することにするが、「冠音」ともいう。Postcoda とは、去聲の起源と考えられる *_hなどを指す「後韻尾」のことである。まだ用語は定まっていない。

つまり「ゝ部」という場合は介音を含まず、「韻母」といったばあいは介音を含めていうことになる。ただし、「この字の韻母は歌部」というように、厳密に區分して使い分けてはいない。逆に介音を聲母の一部として見る方が合理的である。

上古音の聲母と韻母

中古音は、『切韻』（六〇一年の序文）で一九三韻（改訂増補版である『廣韻』（一〇一一年）では二〇六韻）に分けられ、代表字で名付けられている。聲母も宋代の三十六字母をもとに反切⁽⁴⁾の分析から細分され、一部新たな別の名稱が與えられている。どの字がどの韻に屬するかは明示されており、聲母も反切により確定できる。後述する字典やインターネットのサイト上で上古音とともにそれを見ることができ。また『韻鏡』等の韻圖を参考に、中古音はほぼ實體に近いであろう音價が復元されている。

これに反し、上古音の聲母と韻母は、主に『詩經』の押韻字と諧聲

字系列（聲符が同じ字）に基づいて分析され歸納されて作り上げてきたものである。さらに閩語など古い形を留めている方言や、初期のベトナム借用語、チベット・ビルマ諸語などとの比較を通して研究が進んでいる。従ってそれは中古音とは違い、研究者により名稱と區分にかんがりの違いがある。再構音（以下擬音という）に至っては大いに異なっていることを、あらかじめ承知しておかねばならない。

聲母

上古音の聲母については、中古音の聲母の名稱を準用して代表漢字による名稱（例えば「端母」または「端紐」のように、「ㄥ母」「ㄥ紐」という）を與えて示すもの（「表①」「表②」「表③」と、擬音のみ、つまり國際音聲記號や独自の記號で示すもの（「表④」「表⑤」「表⑥」「表⑦」）とがある。對照すればすぐ分かるように、ここにも大きな差異がある。大陸の研究者は多くが②王力の研究成果を利用しているが、彼の著作は數が多く、執筆の時期により内容に少し異同があるので、参照する時には注意が必要である。「表①」「表②」を参照。②王力に挙げた著作のうち、『同源字典』が少し他と異なる。

照二組・照三組および喻三・喻四

中古音において聲母を表すのに三十六字母が用いられる。しかしこれは唐宋から宋代にかけての音に基づいており、『切韻』の音とは少しずれがある。反切の分析により一部の違いが明らかとなり、齒音二等・三等の聲母「照母・穿母・牀母・審母・禪母」と「喻母」がそれ

ぞれ二分されることになった。従來の名稱を使い、「照二・照三」等とすればよいものを、各自が新たな名稱をつけたため、混亂が生じている。「表③」に整理したので参照されたい。これを上古音の聲母名として使っている。なお「ㄥ等」とは、四段に組まれる韻圖の何段目にその聲母が配置されているかを表す語である。

「表①」「表②」で舌上音・舌面音と名づけられている照三組の音は、中古音では齒音に分類されるが、上古音では舌音類に入る。つまり端紐（端母・透母・定母・泥母）と關係が深い。拗音介音^ㄨ（あるいは卷舌介音^{*ㄨ}）の影響で後に聲母が變化し、さらに後に照二組の聲母と合流したのである。するとその後を埋める形で中古音に新たに端紐から分かれた「知母・徹母・澄母・娘母」が出現するが、上古音にはこの四聲母はまだなくて、介音の有無のみがあったと考えられる。照二組は、齒音の「精母・淸母・從母・心母」が介音^{*ㄨ}の影響で卷舌化した聲母である。

「喻母」も反切により二分されて、喻三（云母・于母）と喻四（餘母・以母・羊母）とに分かれる。王力のいう喻母は喻四のことである。一方で喻三（云母・于母）は反切では匣母と違いがなく、匣母に含めてよい。つまり王力の匣母は、中古音の匣母＋喻三を表す。

代表字による聲母の提示は、區分を一目で知ることができる反面、音の實態が見えにくい。つまり介音や前綴の有無が見えてこない。しかも各研究者が復元した擬音にばらつきが大きい以上、代表字による表記はまさに方便である。

「來母」と「喻四」の音價

中古音において來母は「ㄌ」、喻四は「ㄌ」である。しかしチベット・ビルマ語との比較などに基づき、上古音ではそれぞれ* ʃ と* ʒ であったと考えられている。つまり上古・中古間で、 r と l の變化が生じた。王力は「表①」「表②」のようにまだこの説を取り入れていない。『漢書』地理志に *Μελένδρεα* (Alexandria) が「烏弋山離」と記されていることが、よくその證據の一つに挙げられる。「lex」に弋(喻四)が、「dr̥cia」に離(來母)が宛てられている。ただし喻四には* ʒ 以外の起源も想定されている。

複聲母と介音および前綴

「各」「落」等から* ʃ を、『爾雅』釋器の「不律、謂之筆」から、* d 等の複聲母つまり二重子音が想定されてきた。現在では、介音として* ʃ 、* ʒ 等、前綴として* ʃ 等々を復元し、チベット・ビルマ諸語や方言(特に閩語)との比較を通して、その語義や語法上の役割を論じるようになってきている。⑨鄭張尙芳、⑩潘悟雲、⑪B SOC、⑫金理新に詳しい。特に⑨鄭張尙芳は、聲母の構造を韻母と同様に、**聲母** = **聲首(冠音)** + **聲幹(基子音)** + **聲尾(墊音)**としてゐる

なお介音の* ʃ 、* ʒ 等は上に述べたように、子音の發音に影響し、聲母の變質を促し、後に端組「ㄌ」etc. から中古音の照三組「ㄌ」etc. などの聲母を、泥母「ㄌ」から日母「ㄌ」を、精組からは照二組「ㄌ」etc. などを生み出した。

韻母に關しても同様に、* ʃ 介音が中古の二等韻になり、* ʒ 介音が三等韻となった。逆にいうと、中古音二等韻の字に上古音* ʃ 介音を、中古音三等韻に* ʒ 介音を復元したのである。

その他に中古音の合口介音「w」も考慮しなければならない。一説に、この合口介音は上古音には存在せず、圓唇性牙喉音* k^w 、* ŋ^w -etc. や圓唇母音から後に生じた(* o^w uo等)とする。

韻母の分類(詩の押韻)

韻母は『詩經』『楚辭』等の押韻と諧聲字系列によって分部を行い、中古音に倣って代表字をあて、これを「ㄌ部」と名づけている。今の形になるまでには主に清儒の研究があった。これは音韻學の概説書に言及がある。分部の違いが表示されているものも多いので参考になる。

韻部の名は、中古音の韻と同じ名づけも多いが、聲母の場合と異なり、そのことによる混亂は少ない。現在ほぼ三〇部に分ける。ただし研究者により韻部名が少し異なり、通し番號は全く異なる。「表⑤」に別稱を書き入れた。「表⑥」も参照。さらに「祭部(去聲韻)」を「月部」から分立させると、三一部となる。⑭王力は、冬部を侵部と分けず二九部としたが、『同源字典』では冬部を立て、三〇部とした。

さらに細分して全く新たに名稱をつける研究者もいる。⑮鄭張尙芳『上古音系』がその一例で、利用する時は、「表⑦」を参照。また細分しても番號のみを付け足し、「ㄌ部(一)」「ㄌ部(二)」とする場合がある。⑯OCMはそれである。異なった研究者の擬音を見比べるには、後者の名づけの方が分かりやすくありがたい。

中古音でいう聲調のうち、平聲・上聲・去聲は同一韻母に含め、入聲は獨立させる。ただし一部の研究者は入聲を陰聲の韻部に含めて名づけている。⑦李方桂がそれである。

主母音の数は現在、六母音 [i, u, e, o, a] (あるいは [ə] のかわりに [ɛ] または [ɛ̃]) がほぼ定説となっている。「表⑧」「表⑩」「表⑫」を参照。その一方で一つの韻部に對して複数の主母音を主張する⑦李方桂のような説もある。音聲的に主母音が近似していれば押韻は可能である。單一主母音の場合は、介音や韻尾に違いがあったとする。

聲調(特に上聲と去聲)の起源と韻尾

韻部どうしの關係を「表⑤」に従い、簡単に説明する。左右は、韻尾の性質により、陰聲・入聲・陽聲に分ける。入聲は中古音と同じで、内破音 *p, *t, *k で終わるもの。陽聲は鼻音 *m, *n, *ŋ 韻尾のものである。陰聲については、⑨カールグレンが初めに *p, *t, *k 等濁音子を提起した。現在では開音節つまり母音で終わる音節と、中古音の上聲・去聲の起源となる韻尾があったとする説が有力である。

次に「表⑤」上下を見る。發音部位から、喉音韻尾 *h, *k, *ŋ・舌音韻尾 *i, (j), *t, *n・鼻音韻尾 *p, *m の三類(用語は人により異なる)に分け、次に主母音ごとに細分される。

なおこの他に *h, *l, *ʃ 等の韻尾も考えられている。特に *ʃ 韻尾は中古音の去聲の起源とみなされている。

中古音以降、入聲は陽聲韻と組み合わせられ、いわゆる平上去入の四聲を構成するが、上古音では、むしろ陰聲韻と結びつきが強い。その

ため⑦李方桂は、入聲の韻部を陰聲の韻部に合流させているが、それは名稱だけで擬音は入聲韻尾で復元している。

後世の聲調の上聲・去聲は、上古音では調値ではなく韻尾の違いが想定されている。入聲韻尾が内破音 *p, *t, *k であるのと同様に、平上去も韻尾が異なり、後世それが聲調に變化したと考える。⑦李方桂は、上聲に *x を、去聲に *h を宛てている。他に、上聲は韻尾が聲門閉鎖音 *ɰ、去聲は *ʰ、平聲は無しとする説が有力である。⑨鄭張尙芳および⑫ B-S がそれである。⑪ OCM は去聲に *h と *ʰ を併存させている。

なお上古音としては、後世の平上去聲をまとめて同一韻部とみなす。

その他

「表⑤」の一覧を見ると、幾つか形が歪なことに気づく。まず喉音韻尾 *g, *k, *ŋ の韻部の数が多い。⑦李方桂(三三頁)は聲母(「表④」参照)と同様に、圓唇舌根音韻尾を想定した。つまり、陽聲韻尾を四種類 *m, *n, *ŋ, *ŋg に、入聲韻尾も *p, *t, *k, *kw の四種類とした。韻部の名に宛てると、幽部: *aw, *akw、冬(中)部: *engw、宵部: *aw, *akw である。二類に分けることで擬音の主母音の数を減らすことができる。しかしこれに賛同しない者も多い。

次に唇音韻尾の「談・葉(益)・侵・緝」部に陰聲韻尾がないのはなぜか。諸聲字には後で述べる對轉(韻尾の交替)關係が認められる。例えば、

世(祭部書母)―葉(葉部以母・書母)―泄(祭部以母・心母)

去(魚部溪母) — 怯(葉部溪母) — 法(葉部幫母)

〔以 || 喻四、書 || 審三〕

*-ps (*ps) < *ts (*ts) < *p (*p) / ɸ (去聲) などの變化が考えられる。またこれらの形聲文字が造られたのは『詩經』の時代よりもかなり前であることが分かる。そこで幽部・宵部が、*p、*m に對應する陰聲韻であるとも言える。

なお上古音から中古音への變化をどう音理的に説明できるかということも一つの課題となる。さらに言語の分類上同系とされるチベット語との比較により修正されてきている。また通假字も、上古音研究の材料の一つであり、互いに補い合う関係にあり、現在の復元は絶対的なものではない、ということも承知しておかなければならない。

通假の判断基準

音よりもまず文脈その他による字の解釋が先決である。それから漢字音の判断である。

通假の判断基準となる同音であるとか音が近いとかは、どうやって判断するのか。通假は四種に分けて見ることができる。まず同音(雙聲疊韻)つまり聲母と韻母(總稱して聲韻という)がともに同じもの、次に聲が近く韻が同じ(疊韻)、三つ目に聲が同じで韻が近い(雙聲)、最後に聲韻ともに近い(聲韻どちらも異なる)もの。

聲母については、唇・舌・齒・牙喉音の四類の中でそれぞれ通假するが、特に來母と心母・邪母はこの枠を越え、諧声字に「嵐・風」「雖・堆」「谷・俗・浴」等々がある。また明母は喉音の曉母と連なり、「母・

海」「默・黑」の例がある。

上古音の韻尾は、陰・入・陽の三類に分かれる。主母音が同じでこの韻尾が置き換わる関係を特に對轉という。「表⑤」における左右の関係である。⑩王輝『古文字通假字典』は音の近縁について、⑪王力『同源字典』の定義づけに従い、對轉の他にさらに旁轉とか通轉とかを説明している⁸⁾。雙聲疊韻や陰入對轉はともかく、これらは、通假字の音の遠近をみる目安にはなるが、研究者により、聲母韻母の所屬が異なることもしばしばである。また漢字による聲母名だけでは、介音の有無や前綴の違いなどが見えてこない。擬音を見るべきであろうが、これも人により異なる。

この通假字の音の「ずれ」がまた逆に上古音研究の材料となる。文脈による解釋が最優先であり、現時点での分部や擬音が離れていても、通假するものがある。擬音のみで判断はできない。通假の可否の明確な境界線はないと言える。

通假字例

今われわれが通假字を見る時、だいたい以下のような手順をとるであろう。

まずその字の上古音を知るために、⑩郭錫良『漢字古音手冊』あたりを引いて、聲母と韻母とを確認する。雙聲疊韻の同音であれば、特に問題はない。その二字が雙聲のみ、疊韻のみ、またはどちらでもないとなれば、聲母表・韻部表を眺めながら、聲母や主母音・韻尾の違いを見ることになる。

そしてさらに擬音（再構成音）を見てみようとなる。①漢字古今音資料庫、②韻典網、⑩BSは簡単に見ることができ、最近よく使われる⑪OCMは、まだ常備している図書館が少ない。また⑫BSはかなり専門的で上古音研究を志す者には有益でも、とりあえず音だけ確認しようとするには、擬音表示が細かすぎる。

これと前後して他の通假例を、⑬王輝『古文字通假字典』や⑭劉信芳『楚簡帛通假匯釋』・⑮白於藍『簡帛古書通假字大系』等で確認する。傳世文獻の通假例も、⑯高亨・董治安、『古字通假會典』等で調べておく。『漢語大詞典』でも主な通假例は採られているので参考になる。

通假字例一、寔・對

本誌第四號で私が擔當した「𦉳簋」に「作寔在下」の句がある。そこで以下のように解釋した。略して引く。

近年出土の清華簡『周公之琴舞』に、「寔天之不易」【天の不易に寔す】とあり、李學勤は、「寔、讀爲「對」として、『金文編』卷四・頁二七二の、「寔」の字例を挙げ、「𦉳簋」のこの「睨在位、作寔在下」と、「秦公簋」（集成4315春秋早期）の「睨寔在天」等もみな、「對」と讀むべきことを指摘する。『金文編』のもう一例、「楚簋」（集成4246・4247・4248・4249西周晚期）の「寔揚天子丕（丕）顯休」は、容庚がすでに「寔揚」を「對揚」と讀んでいる。「作對」は、天に對應させること、天の命に應じてそれに合わせることである。今この二字の上古音を確認してみる。⑩郭錫良『漢字古音手冊』で聲母と韻母とを見る。寔：〔古〕端質 *teu*（八二頁）、および、對：〔古〕

端物 *tuu*（二三八頁）とある。それぞれ端母質部と端母物部に屬する。この二字は聲母は同じ、韻尾も同じだが、主母音が異なる。聲母が同じで韻母も近いと言える。つまり「寔」を「對」の通假字と見ることに問題はない。

ついで他の例や他者による擬音を見てみる。⑯王輝『古文字通假字典』で、「寔」字の所（五七九頁）を見ると、この二字に「質端」「物端」と韻母と聲母を示し、例として「楚簋」の、「寔揚天子丕顯休」を引く。

念のため他者の擬音も見てみる。なお『廣韻』では「寔」字に二音あるが、植物のへたを意味する「都計切」の音で見えていく。上段が「寔」、下段が「對」である。まず①漢字古今音資料庫を見に行く。高本漢（カールグレン）は韻部を立てていない。（*）記號は省略）

〔寔〕

〔對〕

高本漢：	韻部	聲母	韻母	韻部	聲母	韻母
王力：	脂	t	ieid	微	t	uei
董同龢：	脂	t	ieid	緝・微	t	ueh, ueid
周法高：	脂	t	er	微	t	wer
李方桂：	脂	t	ihh	緝	t	ahh

〔對〕字を⑩郭錫良は「物部（＝微部入聲）」としているが、他者はみな異なる。次に、②韻典網で、⑨鄭張尙芳『上古音系』の音を見る

鄭張尙芳：至部 *ti:gs*

内部： *tu:bs*

韻部名はそれぞれ去聲韻の名稱なので〔表⑦〕を見ると、「質部」と「緝部」にあたることが分かる。次に、⑪ OCMと、⑫ B-Sを見る。

⑪ OCM tɿs tɿts

⑫ B-S [t-]rɿ[ɿ]s [tʰ]u[p-s]

以上を見て分かるとおり、擬音にかなりの差があるが、⑫ B-Sを除いて一人の擬音の中では、二字の音が近いことは分かる。

さらに⑨鄭張尙芳と⑪ B-Sは、諧聲文字やチベット語との対比から復元しているので、かなり早期の上古音を表しているはずである。通假字を見るには、時代も考慮しなければならぬ。⑪ OCMには Later Hanと名づけた後漢の音も挙げられているので漢代の通假字であればその擬音の方が参考になるであろう。ちなみに⑪ B-Sの記號□の意味は、「他の子音・母音の可能性もある」ことを表している。

通假字例二、送・朕

「好盜壺」(集成 9734 戰國晚期)に「佳送(朕)先王」という句がある。「送」が「朕が先王」の「朕」と通假である。⑬王輝『古文字通假字典』(七八四頁)は、上古音をそれぞれ、「東部心紐」「侵部定紐」と記し、「心定、舌齒隣紐」と記す。他を見る。

⑬ B-S ⑭ OCM ①李方桂 ②韻典綱

送 : [sʰoŋ-s sɔŋh sungh slo:ŋs

朕 : [ɬem? dɾeŋ? > r-leŋ? dɾiemx lʰum?

旁はどちらも本来の形は「弁」である。諧聲字にもう一つ「朕」(朕+女)の異體字「併」がある。四者ともこの字を収録しないが、

⑩郭錫良『漢字古音手冊』には「餘蒸」とある。「餘母」は「喻四」(*₂)のことであり、上古音では舌音「定」系の一つである。つまり「朕」と聲母は近い。「送」は「心母(s-)」であり、*₂sは接頭辭の可能性が高いので、聲母は別の擬音も考え得る。擬音韻尾の *sと *ʃは中古音の去聲に、*₂tと *₂xは同じく上聲に變化したことを表す。東部・侵部・蒸部という韻部が異なるこの關係を全く説明できない。なお「朕」の諧聲字は「朕」の他に、「勝」(書母蒸部)、「騰・滕・騰」(ともに定母蒸部)などがある。とりあえず以上で筆をおく。

通假字例三、禽・熊

本誌第五號に所載の山田崇仁「競之定銅器群」に、楚の國君の姓として「禽」と書かれている。傳世文獻での楚の國姓は「熊」である。注に、「禽は影紐、談部。熊は侵部。旁轉で通用する關係にある」と記す。以下に他者の擬音その他を表示する。「禽」字を収録しない場合には代わりにその聲符である「今」字を示す。

禽(今) 熊

⑩郭錫良 影侵 iam 匣蒸 yan

①漢字古音資料庫

高本漢 (k iam) qim

王力 (侵 k iam) 蒸 yiwən

董同龢 談 qiam/侵 qim 蒸 yiuən

周法高 談 qiam/侵 qiam 蒸 yiwən

李方桂 談 qiamx/侵 qiamh 侵 gwim

②韻典網 侵 q^hw:m/談 qiamʔ/qlums 侵 g^wlum

⑪ OCM (侵 kam) 侵 wam

⑫ B-S ([k]r[ajm]) C.[aj^w(r)am

ともに侵部の字で、「齷」字は「今」を聲符とするので、聲母に少し違いがあったと看做せる。言うなれば、「韻韻旁紐」である。後に「熊」の音は變化して、韻尾が *₁ ㄐ から中古音では「ㄑ」となった。『廣韻』は羽弓切、東韻である。王力・董同龢・周法高は、中古音に引きずられて、分部を誤ったことになる。この通假例や、閩語で熊を [ɕim] ということ等から、「熊」を侵部に入れるようになった。なお⑫ B-S の記號 □ は、「他の子音・母音の可能性がある」ことを表し、() は「無かったかもしれない、中古音では無いものと合流する」ことを示す。

⑬王輝『古文字通假字典』(三四四頁)を見てみると、楚王の姓を「齷」と書く『包山楚簡』二一七と、『望山楚簡』一・一九の例や、他の金文の例を挙げている。

通假字例四、恣・喜・疑

前項と同じく、「競之定銅器群」の中で、「楚王齷(熊)恣」を、傳世文獻の悼王(熊疑)に比定するという所に出てくる。各書、「恣」字が収録されていないので、「休」で代用する。

休 喜 疑

⑩郭錫良 曉幽 xiau 曉之 xia 疑之 ɲia

①漢字古今音資料庫

李方桂 幽 h jægw ㄋ̂ hæg/hjæg ㄋ̂ ng jag

②韻典網 幽 q^hu ㄋ̂ q^huʔ ㄋ̂ ŋu

⑪ OCM 幽 hu ㄋ̂ haʔ ㄋ̂ ŋe/ŋek

⑫ B-S q^h(r)u q^h(r)e [ŋ](r)a(ʌ uvular)

⑬ B-S の「^huvular」は、口蓋垂音 [N.q.g] 等から「ㄑ」に變化したという意味である。つまり音聲學的に近い音である。聲母は同じ喉音類であり、主母音が異なるだけで十分に通假しうる。なお⑬王輝『古文字通假字典』にこの三字が關わる通假例は載らない。

主な工具書

インターネット
網棚の上を見よ

上古音の再構成音を、インターネット上で見て参照し利用することができる便利な時代となっている。通假字を見る時には、その聲母と韻母とを確認し、その音が同音なのかまた近いか遠いかを判断していくことになる。

① 漢字古今音資料庫 <http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/cr>

國立臺灣大學中國文學系と中央研究院資訊科學研究所の共同開発によるもので、その漢字の中古音および上古音の聲母・韻母その他の音韻情報についてすぐに知ることができる。簡牘などの字形が見れる別頁もある。上古音では、⑬高本漢(カールグレン)・⑭王力・⑮董同龢・⑯周法高・⑰李方桂の擬音を見ることが出来る。それぞれの元になる出版物は左記のとおり。

一、王力『漢字古今音表』(修訂本) 北京:中華書局、一九九九年。

李珍華、周長楨編撰。

二、李方桂：《上古音研究》北京：商務印書館、一九八〇年。

三、周法高：《周法高上古音韻表》臺北：三民書局、一九七三年。

張日昇、林潔明合編。（未見）

四、董同龢：《上古音韻表稿》臺北：中央研究院歷史語言研究所專刊甲種之廿一、一九六七年。

五、羅常培、周祖謨：《漢魏晉南北朝韻部演變研究》北京：科學出版社、一九五八年。

六、Bernhard Karlgren, *Grammata Serica Recenssa* (Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities, Bulletin No. 29, 1957). 中譯本：《漢文典》（修訂本）上海：上海辭書出版社、一九九七年。

② 韻典網 <http://ytenx.org/> 上古音系構擬周秦古音

⑨ 鄭張尙芳『上古音系』（上海：上海教育出版社、二〇〇三年）の誤植を正し、擬音を國際音標の標準形式に改めたものである。チベット語その他との對比を行い、分部は他者とは大いに異なり、より細分化されている。「表⑦」にその對照表（當該書の一六八頁）を載せる。（一）内の名稱が細分化された韻部名あるいは獨自の名稱である。つまり他書と參照する際には左側の名稱で見ればよい。また表の注にあるように、上聲韻尾に*ɨを、去聲韻尾に*ʉを再構している。

上古音は本人の擬音一種類のみであるが、中古音は六者の擬音が載る。書籍版も上古音字典として活用できる。

③ 東方語言學 <http://www.eastling.org/> の中にある

上古音查詢 <http://www.eastling.org/oc/oldage.aspx>
 サーバー破損により二〇一八年三月時點、閲覽不能。

主な上古音字典

④ GSRと略す。Karligen, Bernhard. *Grammata serica recenssa*. (Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities, No. 29). Stockholm: Museum of Far Eastern Antiquities, 1957. カールグレンが編んだ字書。一九四〇年の *Grammata serica* の改訂版。漢字を聲符によって分けて通し番號を附し、上古・中古・現代音を記し、その變遷がたどれる。歐米の研究者が漢字を扱う時、この通し番號と音をよく利用する。漢譯本は、高本漢『漢文典』（修訂本）、潘悟雲ほか譯、上海辭書出版社、一九九七年。①漢字古今音資料庫で見れる。

⑤ 陳復華・何九盈『古韻通曉』北京：中國社會科學出版社、一九八七年。聲母・韻部は王力三十部（冬部は侵部より分離）に従う。上古音韻母ごとに聲母順に配列。さらに中古音の反切・韻目などを載せる。筆畫索引あり。

⑥ 唐作藩『上古音手冊』（增訂本）北京：中華書局、二〇一三年。文字通り上古音のみの字典。配列は現代音の pinyin 順、王力『古代漢語』に従う。韻母・聲母・四聲を表示。擬音はないが、上古音の聲母・韻母の確認には簡便。筆畫索引あり。

⑦ 周法高『漢字古今音彙』香港：中文大學出版社、一九七四年。
 董同龢・高本漢・周法高三家の擬音を載せる。

⑧ 李珍華・周長楫『漢字古今音表』北京：中華書局、一九九三年。
⑨ 王力『漢語史稿』（修訂本）科學出版社、一九五七年、上册に基づき、⑩ 郭錫良『漢字古音手冊』を参照し、擬音を一部變更。配列は、中古音・上古音・近代音・現代音の順で、現代音は普通話（北方方言）・吳語（蘇州話）・湘語（長沙話）・贛語（南昌話）・客家語（梅県話）・粵語（廣州話）・閩東語（福州話）・閩南語（廈門話）を表示。

⑨ 鄭張尚芳『上古音系』上海：上海教育出版社、二〇〇三年。第二版・二〇一三年には、附録三篇（上古喉冠「聲母的腭化・上古韻類與分韻字表・上古詩歌標音示例―「關雎」が追加された。チェット語との対比で上古音を復元している。分部が他者より細かく、入聲韻を濁音子音とするのは特異である。上記の②韻典網でインターネット版も利用できる。

また林連通・鄭張尚芳『漢字字音演變大字典』江西教育出版社、二〇一二年、にも鄭張尚芳と高本漢・王力・李方桂四者の擬音を載せる。

⑩ 郭錫良『漢字古音手冊』（増訂本）北京、商務印書館、二〇一〇年。配列は、現代音の韻類・聲母順。現代音を知る者には引きやすい。筆畫索引あり。⑪ 王力『漢語史稿』（修訂本）に従い、上古音だけでなく中古音も並び、王力の擬音を載せる。

⑪ OCMと略す。Schuessler, Axel（許思萊） *Minimal Old Chinese and later Han Chinese : a companion to Grammata serica recenssa* (ABC Chinese dictionary series / Victor H. Mair, general

editor) University of Hawaii Press, c2009 韻部ごとに表を作り、論考を加えている。後ろで紹介している⑫ *A Handbook of Old Chinese Phonology* の音も一部載る。ただしそれは下記の⑬で修正される前の音であり数も少ない。*Grammata serica recenssa* は⑭を参照。カールグレンが一九五七年に編んだ漢字の字書「*Minimal*」とあるように、最大公約数的な擬音。また假説の段階であるものや異論の大きいものは除いて再構成している。

⑫ B-Sと略す。Baxter, William H. (白一平) and Sagart, Laurent (沙加爾) *Baxter-Sagart Old Chinese reconstruction, version 1.1* (20 September 2014) 現代中國語 pinyin 順の配列 (order: by Mandarin and Middle Chinese) エクセル形式のファイルが、下記よりダウンロードできる。http://ochbaxtersagart.lsa.umich.edu/

PDF ファイルならここよ。http://ochbaxtersagart.lsa.umich.edu/BaxterSagartOCbyMandarinMC2014-09-20.pdf

なおカールグレン『漢文典』順の配列 (order: by *Grammatica serica recenssa* number) と、部首筆畫順の配列 (order: by radical and stroke) もダウンロードできる。

主な通假字典

上古音の聲母韻母を載せ、さらに中古音も載せるものが多い。前の二種は傳世文献を主とする通假字字典。後の四種は主に出土資料を対象とするものである。これ以外にも数多く出版されている。

- ⑬ 高亨・董治安『古字通假會典』濟南・齊魯書社、一九八九年。いわゆる傳世文獻の通假例を見るのに使える。諧聲系列に分けて通假字を配置しているのが特色。ただし韻部は高亨独自の一九部。索引は筆畫のみ。
- ⑭ 馮其庸・鄧安生『通假字彙釋』北京・北京大學出版社、二〇〇六年。部首筆畫配列。現代音、中古音の韻目・聲母・四聲、上古音の韻母・聲母を載せる。上古音は、⑥唐作藩『上古音手冊』と⑤陳復華・何九盈『古韻通曉』（三〇部）を見て定めたところ。整理が済んだ簡帛資料も用いたというが、あまり多くはない。卷末に韻部別の「通假字總表」が載る。
- ⑮ 劉鈺・袁仲一『秦文字通假集釋』西安・陝西人民教育出版社、一九九九年。王力主編『古代漢語』（表⑥）の注3参照の韻母・聲母に従う。収録字数はあまり多くない。下記の三著で間に合う。
- ⑯ 王輝『古文字通假字典』北京・中華書局、二〇〇八年。王力主編『古代漢語』（表⑥）の注3参照の三〇部に従い、各部ごとに⑰王力『同源字典』の聲母、五大類、七小類の三二聲母順に配列。字の韻母・聲母と現代音を示し、さらに雙聲・疊韻や對轉などの類別を書き加えている。主に金文・簡帛などの通假字を載せる。索引が三種（筆畫・音序・四角號碼）用意されている。實例や傍證を載せるので有用。先に『古文字通假釋例』臺北・藝文印書館、一九九三年を出しており、その改訂版。
- ⑰ 劉信芳『楚簡帛通假匯釋』北京・高等教育出版社、二〇一一年。配列は朱駿聲『說文通訓定聲』の韻部十八部に従う。聲紐は、⑥
- ⑱ 唐作藩『上古音手冊』を准とすると前言にあり、またその「十一家古韻分部異同表」は「一目了然」と稱える。下編に楚簡帛の釋文を載せるので、便利。
- ⑲ 白於藍『簡帛古書通假字大系』福州・福建人民出版社、二〇一七年。先に出した、『簡牘帛書通假字字典』福建人民出版社、二〇〇八年および『戰國秦漢簡帛古書通假字彙纂』福建人民出版社、二〇一二年の擴充修訂版。聲韻は、⑤陳復華・何九盈『古韻通曉』、つまり三十部に従う。韻部ごとに分け、諧聲系列に沿って並べる。索引は聲系を網羅した條目索引と、筆畫索引が載る。
- 主な上古音の概説・研究書**
（上古音字典に所載のものは除く）
- ⑲ 高本漢（カールグレン、Bernhard Karlgren）*Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese*. Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities 26. (1954). 中国語の上古・中古音に関する説をまとめたもの。漢譯は、張洪年譯『中國聲韻學大綱』臺北・中華叢書編審委員會、一九七二年。および聶鴻音譯『中上古漢語音韻綱要』齊魯書社、一九七二年、上古音の韻部を三五に分ける。
- ⑳ 藤堂明保『中國語音韻論』東京・江南書院（一九五七年）、東京・光生館（一九八〇年）再版。第六章 上古漢語の投影法、§ 3.に、陰陽對轉・陽入對轉・陰入對轉の一覽、§ 11.に各部ごとの諧聲音符表が載る。他に、「上古漢語の音韻」『中國文化叢書①言語』

東京：大修館書店、一九六七年にも同様の記述がある。また藤堂明保編『學研漢和字典』東京：學習研究社、一九七八年、およびその改訂版の藤堂明保・加納喜光編『學研新漢和字典』東京：學研プラス、二〇〇五年には、各字ごとに藤堂説による上古音その他を載せるので、上古音字典として使うことができる。またそれぞれ巻末に各部ごとの諧聲音符表が載る。

- ②1 王力 數が多くまた各書がたびたび單行されている。以下に『王力全集』北京：中華書局、二〇一三～四年に所收のもので上古音に關係するものを列舉する。丸括弧内は所收の卷。『漢語音韻學』(四)、『漢語音韻』『音韻學初歩』(五)、『詩韻韻讀』『楚辭韻讀』(六)、『同源字典』(八)、『漢語史稿』(九)、『漢語語音史』(十)、『上古音』(十一)。韻部は、初め二九部。冬部を分立せず、侵部に含める。後に三〇部。

- ②2 賴惟勤『說文入門』東京：大修館書店、一九八三年。第四章「段玉裁の古音十七部説」他が參考になる。恰好の上古音入門書。
- ②3 小倉肇「上古漢語の音韻體系」『言語研究』(日本言語學會)七九。一九八一年。J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/>) からダウンロードできる。

- ②4 李思敬著／慶谷壽信・佐藤進編訳『音韻のはなし——中國音韻學の基礎知識』4《詩經》音系、東京：大修館書店、一九八七年。原本は『音韻』商務印書館、一九八五年。
- ②5 包擬古 (Nicholas C. Bodman) 著、潘悟雲・馮蒸譯『原始漢語與漢藏語』北京：中華書局一九九五年。Pro-Chines and Sino-Tibetan.

data towards establishing the nature of the relationship. In Contributions to Historical Linguistics: Issues and Materials, Frans van Coetsem and Linda augh, eds., pp34-199. Leiden, E. J. Brill, 1980. 他三篇の論文を収める。

- ②6 蒲立本 (Pulleyblank, Edwin G.) 著、潘悟雲・徐文堪譯『上古漢語的輔音系統』北京：中華書局、一九九九年。原本は『*The consonantal system of Old Chinese. Asia Major n.s. 9.58-144, 206-265. 1962-1963.*』

- ②7 李方桂『上古音研究』北京：商務印書館、一九八〇年(もと『清華學報』新9卷1・2期合刊、一九七一年)。「円唇舌根韻尾」(*gw, *kw, *ngw)を設定。賴惟勤「上古中國語の喉音韻尾について」(『お茶の水女子大學人文科學紀要』第3卷、一九五三年)の説がこれに先行する。①漢字古今音資料庫で擬音をみることもできる。

- ②8 董同龢『漢語音韻學』臺北：文史哲出版社、一九七七年。韻部は入聲を陰聲に含めており、二二部。なお『上古音韻表稿』(臺北：中央研究院歷史語言研究所專刊甲種之廿一、一九六七年)による擬音を①で見ることが出来る。

- ②9 周法高「論上古音」(香港中文大學『中國文化研究所學報』第2卷第1期(一九六九)。「論上古音和切韻音」(『中國文化研究所學報』第3卷第2期(一九七〇))。ともに『中國音韻學論文集』香港：香港中文大學(一九八三)に所收。三十一部、入聲を分け、「祭」と「月」を分離。

- ③① 余廼永『上古音研究』香港：中文大學出版社、一九八五年。詩韻による分部は師の周法高に従うが、別に諧聲に基づき一部を細分し、計四十一部に分ける。その韻部により高本漢ほか九家と本人の擬音の対照表を表示する。
- ③② 竺家寧『聲韻學』臺北：五南圖書、一九九一年。音聲學から現代語・方言、近世音から中古音・上古音まで総合的な著述。上古音は三二部（談部と盍部をそれぞれ二分）。
- ③③ 陳新雄『古音研究』臺北：五南圖書、一九九九年。複聲母にも言及する。
- ③④ 郭錫良「殷商時代音系初探」『西周金文音系初探』。ともに郭錫良『漢語史論集』（増補版）、北京：商務印書館、二〇〇五年に所収。
- ③⑤ 何九盈『古漢語音韻學述要』（修訂本）北京：中華書局、二〇一〇年。入門概説書。初版は一九八七年。近年の研究成果には觸れていない。
- ③⑥ 潘悟雲『漢語歷史音韻學』上海：上海教育出版社、二〇〇〇年。上古音の主な問題点を論じており、非常に参考になる。一字索引があるが、収録数があまり多くないので、字書としては使いにくい。
- ③⑦ Baxter, William H. / 田中孝顕譯『古代中國語音韻學ハンドブック』東京：ぎょう書房、二〇一四年。A *Handbook of Old Chinese Phonology*. Trends in linguistics, Studies and monographs : 64. Mouton De Gruyter, 1992. の翻訳。擬音は⑩と⑳よりも簡略である。
- ③⑧ 平山久雄「上古漢語音素體系」『開篇』二五、二〇〇六年。東京：好文社。
- ③⑨ B-SOCと略す。Baxter, William H., and Laurent Sagart. 2014. *Old Chinese: a new reconstruction*. New York: Oxford University Press. 前記の⑳B-S : Baxter-Sagart *Old Chinese reconstruction* の書籍版。論考を含む。かなり専門的であり、細かく記號をつけている。初期のベトナム借用音や福建方言なども参照し復元している。
- ③⑩ 金理新『上古音略』合肥：黃山書社、二〇一三年。韻部および聲母について擬音を論じる。『詩經』押韻字の擬音一覽があり、上古音・中古音を pinyin 順に並べる。著者には他に、『上古漢語音系』黃山書社、二〇〇二年と、『上古漢語形態研究』黃山書社、二〇〇五年があるが、ともに索引がないので使えない。
- ④① Сергѣй Анатольевич Старостин (Sergei Anatolyevich Starostin). *Реконструкция древнекитайской фонологической системы*. (Reconstruction of old Chinese phonology). 漢譯が二種ある。一つは、『古代漢語音系的構擬』斯・阿・斯塔羅斯金著、林海鷹・王冲譯・鄭張尙芳・馮蒸審校、上海：上海教育出版社、二〇一〇年。二つめは、『古漢語音系的構擬』C.A. 斯塔羅思京著、張興亞譯：唐作藩審定、北京：北京大學出版社、二〇一二年。なお第一章の日本語譯が、野原將揮・千葉謙悟兩氏により、『開篇』二七、二〇〇八年・二八、二〇〇九年の兩號に載る。
- ④② 陸志韋『古音說略』燕京學報專號之二十、一九四七年。序文は

一九四三年。また臺北・臺灣學生書局、一九七一年。『陸志韋語言學著作集』(一)(二)、北京・中華書局、一九八五年・一九九九年にも收める。独自の古音研究。

- ④ 馮蒸「二十世紀漢語歷史音韻研究的一百項新發現與新進展」(上)『漢字文化』二〇一〇—五、(下)『漢字文化』二〇一〇—六、(補正)『漢字文化』二〇一一—一。問題點・假説を論文名とともに列挙し簡潔に説明。上古音は計五七項、音變の第八七項も上古音についてのもの。音韻研究の現状が概観できる。

注

- (1) 通假の定義は定まっていないうであり、通假字を論じる多くの論著がまずその定義づけから論を進めている。一例として下記の論文を参照された。
- 來國龍「通假字・新語文學和出土戰國秦漢簡帛的研究」2016年6月20日、澳門大學・武漢大學・香港城市大學・美國佛羅里達(アメリカフロリダ)大學共同開催の「首屆新語文學與早期中國研究國際研討會」宣讀。武漢大學「簡帛網」http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=2772(收稿時間爲2017年3月29日)
- (2) 宋の呉棫、明の陳第、ついで清儒の研究が精しい。中國語音韻學の概説書にそれぞれ記述がある。專著として王力『清代古音學』北京・中華書局、一九九二年。李葆嘉『清代古聲紐學』上海古籍出版社、二〇一二年。等がある。
- (3) その著作 *Etudes sur la phonologie chinoise* 四册、一九一五—二六は、大いに中國の研究者を刺激し、本人と連絡をとりながら修正を取り入れた『中國音韻學研究』として翻譯出版(一九四〇年、長沙商務印書館)された(その後一九六二年、臺灣商務印書館。二〇一四年、北京商務印書館など)。
- (4) 反切は傳統的な漢字音の音注表記である。「○○反」または「○○切」と記し、上字の聲母と下字の韻母とを組み合わせて音を表す。例えば、「雙、許慎切」とある。「雙」字の音は、「許」字の聲母つまり中古音であれば「(x)」「(s)」

(あるいは「h(ç)」「と、「慎」の韻母の同じく「(h)」「(去聲)」を組み合わせて、「(x)」「(去聲)」となる。日本漢字音でいうと「キ」+「イン」で「キン」が導き出せる。

- (5) 等韻圖の一つ。漢字の音節総表。四三枚から成る。いつ誰が作ったのか不明。避諱字から北宋以前の成立と考えられる。南宋の張麟之が入手し序文をつけて刊行(一一六一年)した。その後中國では失われたが、日本に傳わった「韻鏡」が、黎庶昌・楊守敬『古逸叢書』(一八八四年)の一冊として出版されて、中國でも知られるようになった。

(6) 輕唇音(非敷奉微)も唐末頃に幫組から分離したと考えられ、上古音にはなかった。

(7) 「基子音」の原文は「基補音」。⑨鄭張尚芳『上古音系』一一一頁。「墊音」は韻母でいう介音と同じものを指す。墊は「下受け・下敷き」の意。

- (8) 陰陽對轉の理論を最初にしたのは、清の孔廣森である。「對轉」とは、「表⑥」よりも「表⑤」の方が説明しやすい。「表⑤」の左右の關係である。韻尾が陰入陽で入れ替わった關係。「旁轉」とは韻尾が同類の中で、主母音が入れ替わった關係。斜めにしたのが「旁對轉」。その他、韻尾の類が異なる「通轉」という。聲母の方はもつとややこしい。「表①」を参照。まず同音が「雙聲」である。舌音と齒音がそれぞれ二類に分かれるがその上下の關係を「準雙聲」という。つまり「端」と「照」、「初」と「清」の關係。次に横行の關係を「旁紐」という。さらに舌音と齒音が二類に分かれるが、それぞれ斜めの關係を「準旁紐」という。もう一つ「隣紐」というのがあり、縦の關係の一部、喉音と牙音(牙喉音と總稱することも多い)・舌音と齒音・鼻音(疑母と泥母)・明母と來母などの關係をいう。なお『同源字典』はいわゆる單語家族の字書であって、通假字典ではない。
- (9) ⑩藤堂明保の『學研新漢和字典』も見たが、「寔」の上古音を載せていない。「對」は *tuei* とある。

(大阪工業大學客員教授・立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員)

〔表①〕 ⑥王輝『古文字通假字典』 聲母 (p.18)
 ②王力『同源字典』 紐表 (p.18 と p.71) に基づく

喉音		影 ø						
牙音		見 k	溪 k ^h	群 g	疑 η		曉 x	匣 + 喻 3y
舌音	舌頭	端 t	透 t ^h	定 d	泥 n	來 l		
	舌面	照 : 照 3t	穿 : 穿 3t ^h	神 : 牀 3d	日 n	喻 : 喻 4l	審 : 審 3c	禪 : 禪 3z
齒音	正齒	莊 : 照 2tʃ	初 : 穿 2tʃ ^h	牀 : 牀 2dʒ			山 : 審 2j	俟 : 禪 2z
	齒頭	精 ts	清 ts ^h	從 dz			心 s	邪 z
唇音		幫 p	滂 p ^h	並 b	明 m			

②王力の原本には擬音を加えられているが、王輝はそれを省いている。いまその擬音を同書 p.71 に従い、現在の国際音聲記號に置き換えて提示する。 俟母を王輝氏は数が少ないとして牀母に含める。

通假字を見るための上古音概説

〔表②〕 ⑩郭錫良『漢字古音手冊』(増訂本) 例言 (p.4) による聲母
 ②王力『漢語史稿』による 32 声母とその擬音を採用

喉音 (+ 牙音)	見 k 曉 x	溪 k ^h 匣 + 喻 3y	群 g ^h 影 ø	疑 η		
舌頭音	端 t	透 t ^h	餘 d → ʎ = 喻 4	定 d ^h	泥 n	來 l
舌上音	章 t = 照 3	昌 t ^h = 穿 3	船 d ^h = 牀 3	書 c = 審 3	禪 z = 禪 3	日 n
齒頭音	精 ts	清 ts ^h	從 dz ^h	心 s	邪 z	
正齒音	莊 tʃ = 照 2	初 tʃ ^h = 穿 2	崇 dʒ ^h = 牀 2	山 j = 審 2		
唇音	幫 p	滂 p ^h	並 b ^h	明 m		

*擬音は、現在の国際音聲記號に置き換えた。餘母は [d] から [ʎ] に變化したと王力はいう。この餘母を [d] としたため、他の濁音聲母を有氣音 [h] としたが、後に撤回。〔表①〕を参照。

〔表③〕 舌音・齒音の中古音聲母の別稱

その他	⑳董同龢『漢語音韻學』	㉑平山久雄「上古漢語音素體系」	㉒藤堂明保	⑥唐作藩『上古音手冊』	⑩郭錫良『漢字古音手冊』(漢語史稿〔表②〕)	⑬王輝『古文字通假字典』(同源字典)〔表①〕	
爲・雲	云	→匣	于	→匣	→匣	→匣	喻3
	以	羊	喻	餘	餘	喻	喻4
	章	章	照	章	章	照	照3
	昌	昌	穿	昌	昌	穿	穿3
	船	船	神	船	船	神	牀3
	書	書	審	書	書	審	審3
	常	常	禪	禪	禪	禪	禪3
	莊	莊	莊	莊	莊	莊	照2
	初	初	初	初	初	初	穿2
	崇	崇	崇	崇	崇	牀	牀2
	生	生	疏	生	山	山	審2
	俟	俟	○	○	○	俟	禪2

〔表④〕 ㉓李方桂『上古音研究』 p.21

	塞音			鼻音		通音	
	清	次清	濁	清	濁	清	濁
唇音	p	ph	b	hm	m		
舌尖音	t	th	d	hn	n	hl	l,r
舌尖塞擦音	ts	tsh	dz			s	
舌根音	k	kh	g	hng	ng		
及び喉音	•					h	
圓唇舌根音	kw	khw	gw	hngw	ngw		
及び喉音	•w					hw	

* 「-w」は圓唇性を、塞音次清欄の「-h」は有気音を、鼻音・通音の「h-」は無聲音(hm=m̥, etc.)を、「-ng」は「-ŋ」を表す。

〔表⑤〕 ⑩郭錫良『漢字古音手冊（增訂本）』の韻部（例言 p.5）

②王力『漢語史稿』（p.61～63）による

陰			入			陽		
1	之部	ə	2	職部	ək	3	蒸部	əŋ
4	幽部	əu	5	覺部（沃）	əuk	6	冬部（中）	əm
7	宵部	au	8	藥部	auk			
9	侯部	o	10	屋部	ok	11	東部	oŋ
12	魚部	a	13	鐸部	ak	14	陽部	aŋ
15	支部（佳）	e	16	錫部	ek	17	耕部	eŋ
18	脂部	ei	19	質部	et	20	眞部	en
21	微部	əi	22	物部（術）	ət	23	文部（諄）	ən
24	歌部	a	25	月部（祭月）	at	26	元部	an
			27	緝部	əp	28	侵部	əm
			29	葉部（盍）	ap	30	談部	am

* 1. 上段に「陰入陽」を追加。2. 丸括弧に他者の別稱を補った。3. 王力『漢語史稿』は29部で、6. 冬部がない。ここでは冬部を28. 侵部から分立させるが、擬音は同じ [əm]。後に [əuŋ] に變化した。4. 同じ王力であるが、〔表⑥〕と擬音がかなり異なる。

通假字を見るための上古音概説

〔表⑥〕 ⑩王輝『古文字通假字典』の韻部（p.18）

王力主編『古代漢語』に基づく

甲類 喉音韻尾	陰	之 ə	支 e	魚 a	侯 o	宵 ô	幽 u
	入	職 ək	錫 ek	鐸 ak	屋 ok	沃 ôk *	覺 uk
	陽	蒸 əng	耕 eng	陽 ang	東 ong		冬 ung
乙類 舌音韻尾	陰	微 əi	脂 ei	歌 ai			
	入	物 ət	質 et	月 at			
	陽	文 ən	眞 en	元 an			
丙類 唇音韻尾	入	緝 əp		盍 ap			
	陽	侵 əm		談 am			

* 1. 「沃」部は他者の「藥部」。王力も『古代漢語』では「藥部」としている。しかも「沃」字はふつう他書では「覺部」に屬し、人によっては「覺部」の別稱として使う。2. 「陰入陽」と韻尾の種類に名稱を追加した。聲母表の方に王力『同源字典』に従うとあるので、参考に『同源字典』の擬音を入れたが、王力の他書とは異なる。3. 『古代漢語』は學生向けの教科書。修訂を繰り返し今は郭錫良主編。冬韻を立てた30部、王力はそれを侵部に含めた29部。

[表⑦] ⑨鄭張尚芳『上古音系』の韻部表 p.168

		-i-	-u-	-u-	-o-	-a-	-e-
A. 收喉	-ø	脂 (豕)	之	幽 (流)	侯	魚	支
	-g	質 (節)	職	覺	屋	鐸	錫
	-ŋ	眞 (賍)	蒸	冬 (終)	東	陽	耕
B. 收唇	-w	幽 (叫)	幽 (攸)	=u	宵 (夭)	宵 (高)	宵 (堯)
	-wg	覺 (帛)	覺 (肅)	=ug	藥 (沃)	藥 (樂)	藥 (的)
	-b	緝 (執)	緝 (澀)	緝 (納)	盍 (乏)	盍	盍 (夾)
	-m	侵 (添)	侵 (音)	侵 (枕)	談 (凡)	談	談 (兼)
C. 收舌	-l/i	脂	微 (衣)	微 (畏)	歌 (戈)	歌	歌 (地)
	-d	質	物 (迄)	物 (術)	月 (脫)	月 (曷)	月 (減)
	[-s]	至	隊 (氣)	隊	祭 (兌)	祭 (泰)	祭
	-n	眞	文 (欣)	文 (諄)	元 (算)	元 (寒)	元 (仙)

* [原文の補足説明] 1. 上聲 [-ʔ] 尾 35 韻と去聲 [-s] 尾 58 韻を入れていない。それを加えると 151 韻となる。2. 上古晚期、[-ds] [-bs] 12 韻が [-s] に合流し、[-d] と並立する「至・隊・祭」三部が現れるので、表の C. 收舌韻 [[-d] 欄の下] に、[-s] 6 韻 (至・隊 (氣隊)・祭 (兌泰祭)) を増やす。

[表⑧] -1 ⑤潘悟雲『漢語歷史音韻學』の韻母 p.262-263

	-o	-k	-ŋ	-l	-t	-n	-p	-m	-w	-wk
a	魚	鐸	陽	歌 1	月 1	元 1	盍 1	談 1	宵 1	藥 1
e	支	錫	耕	歌 2	月 2	元 2	盍 2	談 2	宵 2	藥 2
u	之	職	蒸	微 1	物 1	文 1	緝 1	侵 1	幽 2	覺 2
i	脂 2	質 2	眞 2	脂 1	質 1	眞 1	緝 2	侵 2	幽 3	覺 3
u	幽 1	覺 1	冬 1	微 2	物 2	文 2	緝 3	侵 3	幽 1	覺 1
o	侯	屋	東	歌 3	月 3	元 3	盍 3	談 3	宵 3	藥 3

[表⑧] -2 潘悟雲による⑦李方桂の母音系統

	-g/-k	-ŋ	-gw/-kw	-ŋw	-b/-p	-m	-d/-t	-n	-r
u	侯	東	○	○	○	○	○	○	○
i	佳	耕	○	○	○	○	脂	眞	○
o	之	蒸	幽	中	緝	侵	微	文	○
ə	魚	陽	宵	○	葉	談	祭	元	歌

[表⑧] -3 潘悟雲による⑧王力的母音系統

	-o	-k	-ŋ	-i	-t	-n	-p	-m
a	魚	鐸	陽	歌	月	元	盍	談
e	支	錫	耕	脂	質	眞	○	○
ə	之	職	蒸	微	物	文	緝	侵
u	幽	覺	○	○	○	○	○	○
o	侯	屋	東	○	○	○	○	○
ò	宵	沃	○	○	○	○	○	○

〔表⑨〕 ① OCM 聲母表 p.16

	(A) 1,4,2 等	(B) 3 等
grave 抑音 (舌を使わない音)	k k ^h g ŋ ʔ h	kj k ^h j gj ŋj ʔj hj
	kr k ^h r gr ŋr ʔr hr	krj - 諸声系列から推測される
	p p ^h b m	pj p ^h j bj mj
	pr p ^h r br mr	prj - 諸声系列から推測される
acute 揚音 (舌を使う音)	t t ^h d n	tj t ^h j dj nj lj
	tr t ^h r dr nr	trj t ^h rj drj nrj
	ts ts ^h dz s r	tsj ts ^h j dzj sj zj rj
	tsr ts ^h r dzr sr	tsrj ts ^h rj dzrj srj
* (A) タイプは切韻音系の 1,4,2 等に對應し、(B) タイプは 3 等に對應する。		

〔表⑩〕 ① OCM 韻部表

1	a	魚	2	ak	鐸	3	aŋ	陽
4	ə	之	5	ək	職	6	əŋ	蒸
7	e	支	8	ek	錫	9	eŋ	耕
10	o	侯	11	ok	屋	12	oŋ	東
13	u	幽	14	uk	覺	15	uŋ	冬
16	au	宵	17	auk	藥			
			18	ai	歌 (1)	19	oi,wai	歌 (2)
20	et,e(t)s	月祭 (1)	21	at,a(t)s	月祭 (2)	22	ot,o(t)s,	月祭 (3)
23	en	元 (1)	24	an	元 (2)	25	on,wan	元 (3)
26	i, əi	脂	27	əi	微 (1)	28	ui,wəi	微 (2)
29	it,i(t)s	質	30	ət,ə(t)s	物 (1)	31	ut,u(t)s	物 (2)
32	in	真	33	ən	文 (1)	34	un,wən	文 (2)
			35	ap,ep	盍	36	am,em	談
			37	əp,ip,up	緝	38	əm,im,um	侵
*まえがき xvi 頁の表に、目次の擬音と韻部名をいれた。								

〔表⑪〕 ⑫ B-S p.69 聲母 Old Chinese main-syllable initial consonants

plain (typeB)	p	t	ts				k	k ^w	q	q ^w	ʔ	
	p ^h	t ^h	ts ^h	s			k ^h	k ^{wh}	q ^h	q ^{wh}		
	b	d	dz				g	g ^w	ɠ	ɠ ^w		
	m	n			l	r	ŋ	ŋ ^w				
	m̥	n̥			l̥	r̥	ŋ ^o	ŋ ^{ow}				
pharyngealized (typeA)	p ^ʕ	t ^ʕ	ts ^ʕ				k ^ʕ	k ^{wʕ}	q ^ʕ	q ^{wʕ}	ʔ ^ʕ	ʔ ^{wʕ*}
	p ^{hʕ}	t ^{hʕ}	ts ^{hʕ}	s ^ʕ			k ^{hʕ}	k ^{whʕ}	q ^{hʕ}	q ^{whʕ}		
	b ^ʕ	d ^ʕ	dz ^ʕ				g ^ʕ	g ^{wʕ}	ɠ ^ʕ	ɠ ^{wʕ}		
	m ^ʕ	n ^ʕ			l ^ʕ	r ^ʕ	ŋ ^ʕ	ŋ ^{wʕ}				
	m̥ ^ʕ	n̥ ^ʕ			l̥ ^ʕ	r̥ ^ʕ	ŋ̊ ^ʕ	ŋ̊ ^{wʕ}				

*rare (pharyngealized : 咽頭化)

〔表⑫〕 ⑫ B-S p.49 韻部 Rhymes reconstructed for Old Chinese

	*-ø	*-j	*-w	*-n	*-m	*-ŋ	*-r	*-t	*-p-	*-k	*-wk
*i	—	-ij	-iw	-in	-im	-iŋ	-ir	-it	-ip	-ik	-iwk
*u	-u	-uj	—	-un	-um	-uŋ	-ur	-ut	-up	-uk	—
*ə	-ə	-əj	—	-ən	-əm	-əŋ	-ər	-ət	-əp	-ək	—
*e	-e	-ej	-ew	-en	-em	-eŋ	-er	-et	-ep	-ek	-ewk
*o	-o	-oj	—	-on	-om	-oŋ	-or	-ot	-op	-ok	—
*a	-a	-aj	-aw	-an	-am	-aŋ	-ar	-at	-ap	-ak	-awk

